



写真で見る社会科

アパタニ族の水田耕作

「牛で牽引する犁を使わずに、平鋤を使った手仕事による水田耕作をアルナーチャルプラデシュ州（インド北東の州）のジロのアパタニ族は今も行っている」と、アッサムのホテルでロンドン大学のアパタニ族に関する民俗調査プロジェクトの代表者であったブラック・バーンさんに教えられた。そのとき、ジロのハリ村出身の理科教師（中学校）ハゲ・コモさん（アパタニの名前は、姓・名の順）を紹介された。2004年2月のことであった。

1年後の2005年2月下旬にコモさんを頼って、通称アパタニ谷に向かった。ジロの街の標高は1564mで谷全体がApatani plateauとよばれる高地に位置している。アパタニ族は古い時代に、この谷に移り住んだという伝承をもち、この谷のみに村集落をつくっている。14の村が山裾に発達し、写真①に見られるように、竹とアパタニ族の故地から持参したと伝わっているBlue Pine（松の一種）などの柱で建つ高床の家屋が村には密集する。谷の中心を流れるケレ川に注ぐ谷筋から灌漑水を引き、畦^{あぜ}越と水路灌漑を併用する、低い畦の棚田状水田が広がっている。1944年に人類学者C.F.ハイメンドルフの調査によって、アパタニ族が広く知られるようになった。当時

の写真からは、男も稲作作業に多く参加していたようであるが、現在では、女性の姿ばかりが目立つ。

ハリ村では、水田は、ジェビ（灌漑水源に近く植付け棒をつかわずに手植えできる泥状の田）、アネ（水源に遠く掘棒を使つての手植が必要になることもある固い田）、ディテル（平鋤による耕起が必要）、ティムベ（水が引けない田）、に分類され、村の水田の5割が肥沃で省力稲作の適地であるジェビである。ジェビでは、2月下旬に有害雑草を、手取りや平鋤で表土を剥がして除草し（写真②）、畦の修復と畦塗りを丹念に行う（写真③）と、水がひかれ湛水で放置され、4月下旬、本田では稲の苗が、畦では、おもに酒の原料となるシコクビエの苗が移植される。2005年8月上旬に再訪した時には、シコクビエが育つ畦の手取除草が丁寧に行われていた（写真④）。一面の畦は、さながらシコクビエ畑となる。現在、焼畑をしないアパタニ族にとっては、畦はシコクビエを栽培する重要な「焼畑」のようだ。稲もシコクビエもいずれ9月～10月にかけて、田の水が落とされ、鎌で収穫される。60年代に導入された稲が育つ水田でのコイ科の魚の養殖が盛んで、無農薬、自然に適応した農業として、有名になっている。〈京都大学東南アジア研究所 安藤和雄〉

写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。国内・海外で撮影された社会科の写真を、資料編集部「中学校社会科のしおり」係までお送りください。